貞操美談
松の花
二

208
15
696

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

208
15
696

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

貞操美談松の花初輯巻之中

東都　松亭金水編次

第三回

其下お竹ハ勿体なき御ことば。坊やよく出来ます。モウ見なさる乳母
さんハおとなしく居なさるによつて。今までより八揃大人しく
其中やア何ながらへよ。その携り乳のうちより。日頃乳母さんが
お出ざらう。お抱しなさらバ先刻もソレ。云て出しなさりつ
吾儕より〳〵も大事めして。可愛がつておくれよ。我儘

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

なかり泣沈くして。悪者の手にかゝりて眼前も
見へぬのに哀しい子供の行く先を見せて。泣せるでもあ
けれど。親に逢せずに泣せば何程の苦労をさせるが
らう。さぞ泣くだらうとおもふから。言て見せるヨト云ば
まさも抱しめて。妻も悲歎のあまり。さあ早く千代松や
母の顔も見せずと見て涙を「コレヤ義母さん何処へ
お出でエ。坊も一所に往う。然して何故そんなに程にお泣きなさるへ。
モウ爺父さんはお帰りだ。泣ずと宜じやアないかエ。

サアやくおかへりヨ。然らばと爺父さんがおいひだヨ坊は
男だから泣ないヨと言ば坊は泣ずと云とて聞わけて母親が
泣はしますれど涙の滴を稚な心に流されんと。云ながらも行
どまらぬ涙は瀧の如く月頃の。捨られしよりも的程らん哀
に見せ合わせ抱られし十次郎は身よりも手を出し「子が貫ふ」と
よまりいでと。何時までやがく泣て居るのぞサア早く往で
来まへ。今もいふ貰う千代松さんが二方にわかれて来ようぞ。コレ
千代松さん方もお義母と一所に往ヤイ泣ずと来ましい。

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

自己アモウ千両程有嗜ハきついの嫌ひで是ハ丈夫なら俗物表
ても客御紙離縁あの千代松さんへやるしの方へ十一ヲナサ連
て御父宜備親父ござりが彼是ともあるゝ自己が引からハ
当然。何時でも客とかの其方へ為し其方も一人の児
残して行の紙合点さ。思ふにつけ悪で来るので是ハイ
本根之御ならコノ男ハつまで親父の方へ来ますふが。
若衆にどのような不孝があつても是に離縁はなるもので。
蝶もさ此の親類に当然ない者でもござへますもうが。何卒

生来親父の方まで。お送りなされくださるとも其
がお名あらく私くゆゑにか為て離縁状あると。中途に一筆書て
下さりまし。全体あの倅らし。妹娘もあるゆゑ其の
妹娘へも嫁らして。来るが順でござへますが。兎かく倅
お気にむづかしの。御容子ならずといふ丈夫なので。親父の方へまゐり
ませうトあの親に添ても何ぶ礼されど。倅ぎ衆も崩されぬ我
家督。十次郎ハまだ幼く。法ぢよ世。男の方へ捨つくとぞその
息子ハよろしうねど。手筈紙書て来たお手か十一サア是を持て

許すまじく出ざる者ぞかし。離縁の状とある紙に認へ
わしとても。それぞれの家の見納めなり。たとへ良人は邪慳
ゆゑあまりも恋慕もあまたの年来。丈婦でこそせ恩
愛は今まであきらめられぬおもへば。雅児を決して他に連れ
他へやりひあぐる。物置は親の乱家。丈婦の縁は切れもかく
も男の児は男親に。着のみ天下の捨子やとて。是もこの
児ばかりはとおもへど。何とぞ我らが寿命で
是非もなけれど。何と此ほど思へど我親掛へて

ありなり。何ゆゑもしらぬ稚児にかける瘦世のなかのみ
庭の冷き他人の手で。育てられるも是非ないと。胴に生まで
胸のうちは。勤めたの十寸鏡。これぞ女子の魂と。世には
いへども今までは。述べる傍器。稚児の。気替も入ぬこゝち
まで。千代松が脊におひまゐらせ家の門へ立ち出ど涙に
くれて道筋の鶴もみえわかぬ。夕まぐれ。潮くて泣くもゆきけり。
跡見送りて十次郎は。雲湧く組居たりしが。やがて莨
盆て咽ぶところほとゝぎす手あぶり桝の隅

よりありあるも。理とその陰陽も。今ハころまでく刀
あくがる毛琉英の目にあらて。おのがぞ溢も海の法の。
世く蝶も灯燈にかゝるも細火蝶の如くぞてくうち
むかひ。顔で硯紙引よせて。筆にまかせし走書。封じて
挨の極に添り「て何ぞる気が気色でかまるも不断添
先ごりや飯でも食ふかト手紙あちてとる古瓶の加減「
まづさう一筆がきあるさ。其まゝヨ水を入ハ湯ト共てきうく
家し喰仕まへば。折から門に人の音。誰ぞとみまたバ郭より

文使に来る例の男「ハイ此免なさいまし。旦那ハお宿
でござりますか 十「アイ何ぞ手紙か 男「ハイ只今そとにお出
あそばさるのヲ。三五ハ松島さんが旦那の申。ちつとも早く
届けろと。何う急いでござりますも 十「お松から大きに此ご
苦労。アノ筆でも認て遣るといふさ程ぐ筆ハわかり 男「
イエ お松ハうしろへ居ませんか。直にお帰りましやシませんト
そとくに立帰るべ十次郎ハ独りごと「定めて今夜の
相図のあるぞ。それとも知らせ文であらう。此方も今出かける

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

処なれど女どりよせのハ。ザアとりのと性急なぐ。全躰
直に引くへして。祝言約束にしられど。女房児のとり
始末。愁歎の場が長をだく。ツイ遅くなるゝ。これハ
不都合ろと。親が不承知しろスア。何のしろ文も戻が
落着しちやア居られへ。モウお菊の爺父やがまゝに
ありて来る時分ぞ。盆ちやア居なからいちろと早く
出るが一の手。文ハ早く月ありで。イヤけの背宵晴
まノえんにともあれさる下封じまで紙入れへ。手早く

推に斜に准備し。門の戸引寄せ。ひゞぞもなく。お菊が
親ことの人ハ。深金にその名高き。不伝家の家隷にて。
その名紙目下仙台家。妻沖菊と両個が中に産し
男児ハ佐七とて。今年廿あの弱冠あり。妹のお菊ハ十
六の業。同じ家中の子なるをべ。その十次郎が新婦と
なし。その翌年男児を産。とある子代松なり。その
後よりして十次郎が。傾城狂ひに多くの金銀を遣ひ
ましてや家産ハ毒の姐にむつび。海産紙を投て

包みしだいて。たちまちに竈へくべ。召使ひける小奴婢に。
眺めやりて親子三人朝夕お菊が身のうへを案じ
なれどそのかひなく。ことしハ又も仙吉夫婦ハおもく
お菊が喜び。思ひの外なる空気ありさま此方へハ何程
云ずみ。縁談あるものも多かれど。今のうち離縁して他へ
嫁入あるものが多けれど お菊ハ貞実にてどこまでも
元にまつはりて。殊に今代松が熱霊にひつたり思ハ
母子の情。能く見る目にも夢中のやうな因果と見えて

今まで〳〵ありし。さて仙吉夫婦ハお菊が体をなぐさめ
此云の石愛陀羅。ゑどり見てる婿の家。門にもらひりと
内へ這入ましバ消残りする焼火ハつらく十次郎の兄元
ざれバ。仙吉夫婦ハ後ふりかへり 仙「モウ何処へか失せおつた。
あるかど呆れ返りしものゝ。ぢつとお菊燈火でもかれぞ。
是からそれ床のうちでも。一足ごとに一個の娘があれく
刺さへ痛までも出来。そのうへにこのまゝはなし
あらふとハ思ひ都へ居るに住て見えのあつるハ

うちに行衛知らずと云ふ中にも。ヤレ千代松が不便さの今
にんも來らうのと言へど婿どのに義理立て。頓と
仕舞るやァ鰻一ツ所の利き陰帳せへ。思ひ念に思ひて
夫婦ござりせ。お預に千代松が首尾も頼んだ。二つ十
まで親の死後。老年の此の上に皺が寄つて。始末ぞ。
何その八夫婦と。ハテよく云ものゞ手前も十次郎に
跡らぬ言葉の。イヤハヤつまる業へ。中へ返らぬ上に納くと。
千その其の外の儚。お菊へと言ふ文を家に置切らるゝ

よりせつなくて。涙より他に詞もなし。やゝありて火鉢にさし
寄りて。まづ文を披き一通り読沸しても。柱のお宮手紙。
仙女夫さへ十次郎。きやいと手紙引き出し。親父の手へ
さし出せば。仙女夫は懐より。眼鏡取り出し。何ぞ明り無さ家
封おし切りて読んで。頓て何こともうち読み「ぞ
己お菊の手にあるのぞ手紙見るゝ。不図しさ男の言葉添くで。
ええや今夜死ねんと。夫に先だち何もない。無理な縁組いつく
お菊は離縁しようのへ。跡の縁者見せまするの寸志。

別て新も八千代松が子。不所存な親の手のつらが因果。
今二三年ゑ女紙伸して。坊主にでもしてやろうと。イヤ
苦しい中を立續けうつゝに死ぬる結でおろう。サア左様
してみれバ。何時まで待ても埒ハあかぬ。千代松
があやまる方の手紙よくより集めて持て帰らうとて
端紙探し先にさち。納戸の方より押入の隅々までも
探しけ。纔に残りし千代松が。書物の表紙お手鏡が傷方な。
まの亨ぐに元あつ分。難くお気紙吐り流け。空く空紙さし

くぞ見りける。

第四回

「天窓の●「若気まで世より是も是ひとハ未明や気や新しハ
是やアせねッ●「コウく重的まちやなし。魚ろひろう手早ヱ見でさ
るア。自己アお前の妻紙紙端ぎたさイ▲「ハイまだアえや
ぐも涙で泣きやナ●「へ小僧の爲に写ハあれど。紙紙
おりつぶうち読うヱ。ぢくしやうめ▲「今く夜ハ強盗に入れヱるる。
鼻ア描きまゐるのも知らねへさア。とのるさ●「ハア大発

べで。天方の鼻ハ指じやア注まくまれへ。前方も新町の
妓女かなが。至てもやア男のお絶ざるもと言やアグつ〳〵が遠へ
ねへ「ヱ」「己き指ふ悪くいろる。エ。これでも十年振へ逢て
みや。蒸気が覆らア●「今遠へねへ。此処の妓女が。結縁て
浅うさと云ふうけろ。彼も後りどもて居他者ぐ
出版ず驚りて。世界うまへぬ一徳ハ。まさ別世界とある
もすり。夫ふ引うえ覚悟せし。身中も今さう気後き
て。今宵死ぬ身とおもりつゞや。慶所の耳ふ工とあ〻うぞ。

もてと答ふろ堤の寄。流と浦ふうちちあかと。モウ今ハ
お見めも出お死狭のみさでおらう。彼りふ内端お壮狭
自見が去うる放蕩りの狭も。良人ざとおりつゞとて。
為日七日ゑが宅へ。去らりねへでも相うろうぞ。悪の
新をまさるまう。分く〳〵と奔元をまうて。幕ふ一夜も憐
いぞ。如の菓烟ともりのべきすの。稼〳〵さあぐの蕎労
狭うけ。そもこのまあぞ只一個の。廻まで〳〵つけく離縁
よて。アノ松島と一所ふ死ねとへ。とても何様しく周

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

縁にとる紙をやかましと。おもひ続くれば後髪。
引るゝ心地にまてしばしなれ。是紙寄るへ一筋まじくて。大門
ちかくなるまゝに。是は是より先刻の手紙。ところが
其でそのまゝに。懐へ入れて置てすぐ。つかさく使を紙も
うるさへ。何ぞ変ッさるでもあるか。それぞれに此の気
がりと。見返り柳の傍の茶坊。表の店まで来たもあし。
とてでちよつとてまよりに。懐より出すもかの文紙。披
いて見れバとふ如何に。案に差ひし。その文体に。

呆れて霎時忙然とし。どもへ定めて気の迷ひかと。
まづ茶紙と絹茶紙のみ。まぐし元紙静めてまた
押ひらき見るに松齋が。自筆の文に紛ひなし。
さて又平り手紙組て。文を並べ読めつ。小首
かしげて読みくらべ

さんて読めど此方ども作者の筆の書の
ここるあかり紙と書して身うけの相談よ
なりけり。切端まで今ひとつめりけり

げにもありくどまゝならぬが世の中と諦め
ゑりし只心まゝおその家の方へ参りは
宮めの女悩き姉とゆ待りまちもいんもねば
萬でも中ゆ通り済まり候ゑハ済み角をも
ありし済ゝが新家風ふハ身の際りと思召
きりゆそ此むりまりま此所しの母り法
乏りし事ら上をれつ中も済まへど
心と思ひきくまし只一条ト御おほり申し候

よしあしは浪まけかまれりしまき此錦も
花のうちょめりずまの影しゃとのりふかが身
今のうちょうきらしまれれり
めでたく
かしこ
きう紀よりの
十夜
鶯より

十返舎八吐息嘯きへハテぐうも不闘ざらん。今般までそのの

噺しもあれ。恵の身をうけし人ハ合点がいかねへ。何でも此世
でや。仮縄があらう。シテ見れバ今までも源切おりし不粋
や邪と云ふのハ不粋でも。既に今迄ハお倒しく。死
なうとの人その深慮。モウ延引かうねへから。一回通れの
ら切文で腕へ奴女め汝中気になるくの。銀髪若労ハ
まであいて。女房児までに別をさせ。放和しさよその
路宗。究めて茶坊も肉垢も。紋紙ありしさ斬ゑぐらう。終
りまくてせん方毎よ。虫擲と。人の口端にかゝる身の。邪りふ

とる事に成て見すまいぞよく色慾の上流で人ふれ新合
されバ。とりよて遠ざかるとて。最大の若労お茶でも
とますく世界の笑ひ種穿鑿の極つまる今頃のこと。
まゞ佐倉へ往れ志まい。その大老の茶坊は何屋ら。何ぞ
もまご廓のうちに居るに違ひはあるまいぞ。何招して
ありと松海めを探し当てこぎまでの恨みの返治せうけ。
左招して死ぬれバ。意地もある。左招ぞくと二人息心を定
め手拭ひで出して涼く頬冠り。そろそろと急ぎ初む。

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

自ら静めてすつと入る。大門口より右左見。若しかへりもなし
ん気と。奥ぬくいや二階まで。眼鏡とられ徒すりける。勘平
の見ゆるく。紙来る女を誰ぞとうかまへ。松島が体の
雛妓。松枝のお前が十番布に。ようよう掛りと曉き方へ歩くと
潜めますべ。松枝は追来て袖をとらへ「十さん何処へ御出なさる
まし「何処へとつて知れたこと「其で先刻娼妓が。気に入らぬと
なげかましうが。まアそれを看なまし」ト「みな若しいが一向解せませぬ。
数かし様に清くとやら。どうも実らし。行くが遠ひな

枝へ「て逢ひありません。其に就ちやア程ある込入とさ
まけがおまちまちてるぷアア此方へお出なまし」ト。袖紙こらへて
出る。引ちうも。武蔵茶坊へつまそでゆき枝「若いとへおよんな
ましぐらい私が観音宅ずまずまちてる屋ざまずもよ 内の若者ずんる甘田船
奥へへッ。意母はプノ松が枝さん先刻の此の紙お株云ふ子ト
是へ着ずくや酒と盃をひつけるなずるぞ 枝「アおやくお情を中出しまもト十次郎紙議
尽引て中庭の座敷へ奥の院の明る障子ぴつたり
逮とあて枝へ「室あて気も意すまれずらかるくろ。更に奥に嘩

ヤイもし。堀枝ハ何ざますヨ。今朝おまへさんが帰しなさいませ
と。内証の旦那が堀枝を呼なすって。此乃恭さしつさ
佐金のお客が。壱万両身受しようとの。四の五の仔細
今も親のが自包が家の大黒柱ともいわれる此の工。
出来ものハ何様も否ざろう。思入なく言されれど。今おまへア
捧ハねへと云ッしやる。お様して見れバ池に沈りなさる
ぬ。桐蔵様の所ぐ。此夜に金銭をさきしって。殺り
まべ今朝をなく拷て来きしろく。サア其に連て往うとの

とぱまで来るに漸々も。いつて歩せねへとぞろう。日中までの
葬式延ておいて。済度ハ茶坊に詰てどまる。何御信念ろさ
その他ハ数千でも所存務ろう。当人に岐て云て誠せ
とまうしなろう。何処へいろうと。書付にして
出もぐいで。此ハ僥倖のの。アノ旦那ハ佐金じや。アノ若に客
いさ大臣さん。それろう楽に暮されろや。老じ何ろも服
まり平気で都てとまる。と歩るまして。堀枝も親に相談
涙しなましで。なんぼ何でも二三日ハ待て呉なんしと云

なりましたが二三日跡の夕年月も。師さんハ居られたと云
事がござりますが。お客様ハ大将さんで。おまへ様の方へあげる
ました。文を書のも楽のうち。若い衆の書ふと思ふ
ありませぬよ。其で娼妓さんなぞがござりますハ。余り言て上
申ますのも余りの挨拶ませぬ。夫で十三さんにおおまへ
よく相談して呉なましと。急いで言て帰りましたが
要細なして十次郎ハ。娼妓のうちに帰れまで。筋骨なまへ
抜ました。心理では。約束した談にひか

まぬ。仮令大家の身請されても。あらしの身請に等しき
其ところは
人の心ハ移りやすいものぞと。其あの紙にいつかき
とおもふのハ。物綱もいかぞ縁きて。黄防綱もありし
なり。柔術の女が将と其名将ハ。繩子紙なり。まづ
晴しに酒一ツと。諸らまて把絶にお前くらけし滝糸も。
熱燥紙放らてちして。十一将が枝さんで。ア紫て呉る君く
お前方も知つてる通り松島のお蔭じやア。種々な苦労
まで難儀のあめに恵まれ隠らした。その場所に移つた娘来

おやア。誠に丸潰しといふものでござりますのおとじやア云はれぬが。
妓女は紙張編もが活業変化ものは此方の義理で云。
りやうの編も中も。私どもの及ぶものじやアありません。ねへが枝へおもひ
かりしやうも存じやアありません。及ぶもんかまちがひやアありません。
幇間もアノ御方の仕方では仕合と申すものの。深くへ
了簡もあんまりになりました。つぎて十さんに艶気の出ませぬ時に
をまつてくれましと。実に広くの言ひ付けさまつ。是まで
私の根も枝葉ともかくに満足で。おのれへ幇間が御礼して

まするで。永い眼で見て居りました。まんざら身の為の為
ゑへ根に。ぎりしもちやアありません。時それ何処より
帰るのか内へはまず行くべしとぞ。実りの宿へ帰らば
ねど。私の中やせんと胸のうちにさえ沈吟は済ずけり

松乃花初輯巻之中終

208
15
696

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

208
15
696

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

帝國圖書館藏

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用